

書名	月魚	出版年 (西暦)	2001年
著者・編者	三浦しをん	出版社	角川書店
学部・研究科	人文学部人文コミュニケーション学科	学年	1年
<p>人と人とは、美しい絆で結ばれている。だがそれは所詮綺麗事にすぎない。この作品でふたりを繋いでいるのは罪の意識である。ふたりの間の、「罪」という名の秘密の共有—これを原点として物語は幕を開ける。</p> <p>光に満ちた表から一步古書店「無窮堂」に入ると、そこには外界を隔絶した静謐な世界が立ちこめていた。この中では時間は止まり、ただただ無音の世界が水底に沈殿している。そこにひとりの男がはいってくる。外気とともに男の煙草の甘くほろ苦い香りが古書店に入り込み、彼の心を乱す。淡彩の世界で生きてきた彼にとってその男の存在は、焦燥と躊躇という表裏一体な感情を同時にもたらす、矛盾のような存在だ。そんな心情を表すかのように、無窮堂の池の主(ぬし)はまるで彼らの心の機微を表すかのように水面(みなも)を繊細に波立たせ、また無機質な月の光は、全てをまるで作り物の喜劇のように照らし出す。</p> <p>物語は、彼らが共有する「罪」とは何なのか、を主題として進んでゆく。過去という舞台の中で心情のみが現在進行形で「罪」を形作る。二人の咎人は永遠に交わることのない道を進みながら、焦がれずにはいられない宿命を科されている。その歪んだ絆を快感と感じてしまったら、無限の箱庭に囚われてしまったも同然である。箱の中の狂気はあまりにも美しく純粋で、戦慄を覚えずにはいられない。このような狂気と紙一重の感情を、作者は驚くほど見事に昇華しており感嘆する。作者はきっと、化学変化のような明瞭とした心情の変化などあり得ないと知った上で、不用意に触れることのできない、危うい均衡に保たれた、非常に曖昧な心情を描いている。罪から逃れたいと思いつつも、男との唯一の繋がりである罪が消えないことを願う—なんと人間らしい歪(いびつ)で美しい願いだろう。</p> <p>朱(あか)と黒が混ざり合うような甘美な秘密の匂いに酔わされてしまいそうだ。</p>			